

東條静夫先生を偲んで

元筑波大学教授臨床医学系
(医療法人 翠明会山王病院腎センター長)

成田光陽

日本腎臓学会名誉会員、筑波大学名誉教授東條静夫先生は、平成17年11月12日心筋梗塞にて逝去されました(享年82歳)。先生は特に持病もなく、生来健康でありましたが、平成11年11月体調を崩され、その後療養に努めておられました。ご家族の皆様の手厚い看護により小康を得られておりましたが、急性心筋梗塞のため幽明境を異にすることとなりました。まことに痛恨の極みです。

先生は昭和23年千葉医科大学卒業後、24年千葉医科大学石川内科(第一内科)に入局されました。石川内科は結核を専門領域としていたため、BCGとアレルギーに関する研究に従事され、昭和29年学位を授与されました。指導された石川憲夫教授は馬杉腎炎の仕事をした馬杉復三教授が血胸(当時結核性と考えられていた)にて療養されたときの主治医でした。療養中、石川先生は後輩である馬杉先生のアレルギー観に深く傾倒され、研究室(第5研究室)を新設し、「滲・濾出機転に関する研究」を始められ、その中心的役割を東條先生に託されたと聞いております。滲・濾出機転に関する研究は、同時にその延長線上にある腎の炎症、ネフローゼについての病態生理の解明を図ることとなり、第5研究室を中心に腎臓疾患の研究を主宰することとなりました。第一内科は三輪清三教授となり、腎臓病研究の面では東條先生の指導の下、体液、電解質、腎機能、免疫学的研究、免疫病理、糖尿病性腎症、腎不全の病態生理など、広範な分野で業績をあげられました。また当時、慢性に経過し進行する腎疾患に対し、体系的な治療法がなかった時代、治療の分野でも積極的に仕事を進められました。抗凝固・抗血小板療法、ステロイド療法、免疫抑制療法、カクテル療法などに関し、治療方式、治療効果、予後に与える影響について発表されました。就中、抗血小板薬が腎疾患の治療薬として有用ではないかと予想されたのは東條先生であり、この治療法はpilot studyを経て、全国規模による多施設二重盲検試験が実施され、その有用性が確認されました。今日においても腎疾患の治療法として一定の役割を果たしているものと考えられます。昭和48年からは厚生省特定疾患「ネフローゼ症候群」調査研究班治療予後分科会会長として、ネフローゼ症候群の定義、治療効果、予後などの判定基準の作成に貢献されました。

昭和50年筑波大学の新設に伴い、臨床医学系教授に就任され、腎臓内科領域を担当されました。筑波大学の医学系は全くの新設であり、また新構想の大学として、講座制の廃止、従来の医学部カリキュラムの大胆な改革、レジデント制の採用などが実施され、これら新しい体制の確立に多大の尽力をなされました。さらに昭和55年からは臨床医学系長に就任され、臨床医学系における人事、運営全般にわたり、優れたリーダーシップを発揮され、医学系の体制整備を行い、今日の基礎を築かれたと思います。卒前教育の充実とともに、卒後教育(レジデント)にも力を注ぎました。“腎臓病だけを診るのではなく、身体全体を診ることのできる医師になれ”が口癖でしたから、安易な他科へのconsultationを厳しく指摘し、まず自身で考える能力をつけることを指導しておられました。先生ご自身内科学に博識であり、広く文献に目を通しておられたので、回診時のレジデントは戦々恐々だったのを憶えています。このことは腎臓内科の教育で最も力を入れた点で、旧講座制での功罪も踏まえ、早くから専門分野に細分化されることにならないよう戒められました。そして、腎疾患の初期より慢性期、腎不全期、透析療法まで一貫した治療管理

能力(腎生検, 組織所見を含む)をもつ腎臓専門医の育成を目指し実践されました。先生の指導を受けた人達が、現在、多数の部門で腎臓専門医として活躍していることは大きな成果だったと思います。研究面では腎の病理, 免疫学的研究, 特に腎炎・ネフローゼの発症機構の解明に向けて臨床的・実験的研究を進められ, 発症機構, 治療法の作用機序の一端を示されました。腎不全の生化学的研究も精力的に行い, 病態の発生に活性酸素など酸化ストレスの関与を示す業績を示しました。

昭和 61 年厚生省特定疾患「進行性腎障害」調査研究班班長に就かれ, 各分科会において業績を示されました。特に本邦における糸球体腎炎の長期経過の調査では, 腎炎各型の発症頻度, 予後, 生存曲線が明らかにされ, わが国の腎炎の自然歴の実態が示されました。これらの成績は, 現在, わが国において基礎的資料として広く用いられております。治療に関しても IgA 腎症に対するステロイド療法の意義を示されています。この間, 昭和 54 年には第 9 回日本腎臓学会東部部会会長, 昭和 59 年には第 27 回日本腎臓学会総会会長を務められ, 腎臓学の発展, 向上に尽力なされました。

このように, 先生は臨床医学を大切にされ, 患者から学び, その原因解明を基礎研究の発想テーマとして, 臨床に還元するという姿勢を貫かれました。このようなお考えで, 先生は千葉大学, 筑波大学を通じ, 100 名を超える腎臓病を学ぶ人達を指導, 医学, 医療の分野に送り出し, 現在それらの人達はそれぞれの部門で活躍しております。それらを思うと, あらためて先生の大きさに感銘を受けます。

先生は仕事の面では厳しく指導されましたが, 日常は優しい方で几帳面, 人の面倒をよくみる方でした。記憶力は抜群で, 一度会った人は名前, 場所もよく憶えていました。そのためもあってか, 先生の周りにはいつも人が集まり, 賑やかでした。そのようにお元気で, 健康に過ごされていた先生が, 突然の病を得られたことに本当に無念の思いを致しております。残された私どもは, 先生の教えを忘れず, 更なる発展のため一層の努力をせねばならないと思っております。

心から先生のご冥福をお祈り申し上げます。